

## 源氏物語に於けるしぐれに関する気象学的考察

### The Concept of Meteorology Relative to the Occurrences of *Shigure* within the *Tale of Genji*

石井 和子 ISHII Kazuko

#### 目次

第 I 章 源氏物語に見る気象現象描写の正確さと気象学的評価	(3) 古今和歌集の世界への萌芽
I - 1 はじめに	4-2 古今和歌集の時代のしぐれ
I - 2 源氏物語に描かれた気象現象の正確性を検証する	4-2-1 古今和歌集に見るしぐれ
2-1 梅雨明け	4-2-2 古今和歌集に見るしぐれの特徴 万葉集のしぐれとの比較
2-2 新涼	(1) しぐれの季節
2-3 台風	(2) 初しぐれの出現
2-4 雪	(3) しぐれと涙
2-5 春の嵐	4-3 源氏物語の時代のしぐれ
I - 3 文学と気象をつなぐ源氏物語	4-3-1 古今和歌六帖によるしぐれの一般的認識
第 II 章 紫式部としぐれ — 古代文学としぐれの変遷	4-3-2 平安貴族のしぐれ観確立の背景を探る
II - 1 はじめに	(1) 大陸伝来の暦による自然観の変化
II - 2 しぐれの一般的現代概念	(2) 平安遷都がもたらした地形的変化によるしぐれ観の確立
II - 3 しぐれということばの変遷	4-3-3 源氏物語に見るしぐれの特徴
3-1 大和ことばとしてのしぐれ	(1) しぐれの季節
3-2-1 中国の時雨	(2) 紫式部が描く独特の陰性のしぐれ
3-2-2 日本における慈雨としての時雨	(3) 比喩としての陰性しぐれが語るもの
3-3 日本のしぐれ	4-3-4 文学における源氏物語以後のしぐれについて
3-4 しぐれと時雨の漢字表記	第 III 章 源氏物語のしぐれの文学的評価と気象描写の比較
II - 4 日本の古典文学に見るしぐれの変遷	III - 1 はじめに
4-1 万葉時代のしぐれ	III - 2 しぐれ各論
4-1-1 万葉集に見るしぐれ	
4-1-2 万葉集に見るしぐれの特徴	
(1) しぐれの季節	
(2) 広範囲に亘るしぐれの地域性	

- 2-1 夕顔の帖におけるしぐれ
- 2-2 若菜の帖におけるしぐれ
- 2-3 紅葉賀の帖におけるしぐれ
- 2-4 ~ 11 葵の帖におけるしぐれ①~⑧
- 2-12 ~ 13 賢木の帖におけるしぐれ①②
- 2-14 逢生の帖におけるしぐれ
- 2-15 少女の帖におけるしぐれ
- 2-16 ~ 17 藤のうら葉の帖におけるしぐれ①②
- 2-18 若菜(上)の帖におけるしぐれ
- 2-19 若菜(下)の帖におけるしぐれ
- 2-20 夕霧の帖におけるしぐれ
- 2-21 幻の帖におけるしぐれ
- 2-22 ~ 23 椎本の帖におけるしぐれ①②
- 2-24 ~ 28 総角の帖におけるしぐれ①~⑤
- 2-29 ~ 31 宿木の帖におけるしぐれ①②③

Ⅲ - 3 源氏物語における陽性のしぐれ、陰性のしぐれのまとめ

第Ⅳ章 気象学から見たしぐれの陽性・陰性

- Ⅳ - 1 はじめに
- Ⅳ - 2 しぐれの気象特性
  - 2-1 しぐれの時期
  - 2-2 しぐれと積雲対流
  - 2-3 しぐれ雲の分布と気圧の谷
- Ⅳ - 3 京都のしぐれと地形
  - 3-1 京都の地形
  - 3-2 京都の地形としぐれ
  - 3-3 しぐれの降水量
  - 3-4 しぐれの時刻
- Ⅳ - 4 しぐれの開始と最盛期
- Ⅳ - 5 しぐれの陽性・陰性と寒冷渦
  - 5-1 しぐれの陽性・陰性と気象特性
  - 5-2 陽性しぐれの天気図特性
    - 5-3-1 陰性しぐれの天気図特性
    - 5-3-1 寒冷渦と天気

5-3-2 寒冷渦と陰性しぐれ

第Ⅴ章 気象学と文学の境界領域

参考文献

図表一覧

参考資料 万葉集・古今集・古今和歌六帖におけるしぐれ

謝辞

要旨

季節の移り変わりは気象学にとってばかりでなく、日本の古典文学にとっても関心の高い現象である。高橋和夫の『日本文学と気象』(1978)はこの問題に関する先駆的業績であり一季節自体が文学のテーマであり、多様な四季の変化が日本民族の文化と論述している。高橋の取り上げた事象以外にも検討すべき課題は多いが、中でも日本民族の文化とするにふさわしい例として、晩秋から初冬に現れるしぐれがあげられる。しぐれは外国には見られない特異な気象現象である。これは日本の位置する地理的、気象的環境に由来する。

本論文において特に『源氏物語』をとりあげたのはしぐれが多様な条件のもとで具体的に観察されており、それが文学的内実と密接にかかわっているからである。

源氏物語にはこのしぐれが31回出て来る。これは清少納言が『枕草子』「ふるものは」または「雪は」の段の終りでたった一回「しぐれ、霰は、板屋。」として取り上げているのとは大きく違う。この違いの理由には、作品の長さもさることながら、その根底には第Ⅱ章に示すように、しぐれという言葉の言語的変遷が考えられる。平安時代には和歌の世界でしぐれは涙や悲しみといった比喩的要素として使われることが多くなり、より物語に適した言葉としての成り立ちがあると考えられる。

筆者がしぐれを軸にして『源氏物語』を読み解こうと試みるのはこのことばのなかに『王朝女流

文学の世界』(秋山 1972)の指摘に通じる、われわれの祖先が古くから歌や物語に込めて来た日本人としての、そして—広くは人間としての—普遍的な感性を感じるからである。

源氏物語のなかのしぐれに焦点をあて、気象学の立場からその普遍的叙情の根拠を考察して行くうちに、秋山(1972)の指摘に加え、奈良から平安への遷都による気象の変化もまた、平安人の自然観や精神基盤に大きくかかわったと思うに至った。

京都でしぐれといえばさっと降っては晴れ間が出る北山しぐれのようなしぐれが意識されるが、この物語ではそればかりでなく、終日晴れ間も無く降ったり止んだりのしぐれが描かれている。筆者は、前者を陽性のしぐれ、後者を陰性のしぐれと名づけ、紫式部が正確な観察眼に依り、それに大きな意味を持たせていたことに葵の帖で気づいた。

なお、陽性のしぐれ、陰性のしぐれの気象学的裏付けについては第IV章で、冬型気圧配置や寒気の強さ、京都の地形等との関係させて述べた。

#### 出版・初出誌

- 秋山虔 1972.『王朝女流文学の世界』東京大学出版会.  
石井和子 2002.『平安の気象予報士 紫式部—源氏物語に隠された天気科学—』講談社.  
石井和子 2006. 文学と気象の狭間. 天気 53: 895-900.

---

いしい・かずこ

1995年2月 気象予報士資格取得